

今月の特集関連本 ②



Domestic Violence Child Abuse DVと虐待

「家族の暴力」に援助者ができること



信田さよ子

自信をもって「介入」するために

「家族の暴力」は、援助者になかで扱われた経験が、
（中略）「家族」という言葉には、言葉としては、
被害者を傷つける。必要なら介入した、
そして「介入」は「介入」になる」という姿勢である。

医学書院

DV と虐待

「家族の暴力」に援助者ができること

信田さよ子＝著

本体 1,800 円＋税／A5 判・192 頁／医学書院／2002

きっと DV に違いない。それでも殴られた妻は夫をかばい、夫は「“ 家庭の問題 ” に首を突っ込んでくるな」という体で威嚇するかのよう。「夫婦喧嘩は民事不介入」とも言うし、無理に介入してよいのかどうか……。支援者が思わずためらう「介入」の正当性と、その方法論を力強く示した画期的な 1 冊。

なぜ虐待された子は親を慕い、殴られた妻は夫のもとに戻るのか——。この「当事者性の不在」という“ 謎 ” 解きから始めないかぎり、援助者は家族の暴力に太刀打ちできない。「味方になる」「第三者を登場させる」「数と時間の効果」などの魅力的な概念を駆使して贈る、まったく新しいアプローチの数々。“ きれいごと ” は一切なしの「介入マニュアル」！